一、徂徠毎朝髪月代いたされ、夜は四つ時に寝られ、常に東野春台など咄しに行れても四つ時を打てば燈を取り寝られたりと、岡井群大夫が咄なりと、大塚五郎兵衛語りき。

一、徠翁、何々と云ふ字の出処は、漢書にありと覚えたりとて、漢書を始より終までくられたり。二字のことにて、大部の書を地獄さがしせられしこと、気情の人なりと、南郭云はれし由、灘水より聞く。

一、二辨論語徴はそらにて書れし文なれば、時々覚違ひあるなり。よつて校正を山井善六に頼まれたり。善六は徠翁に七日後れて死せし人なり。業終らざりしにより南郭春台等是を校正せり。〔山井善六は山君彝なり〕

一、徠翁何ぞ知れぬことを一字二字にても聞に来れば、幾日も留をき出処を付ねば帰されざりしとなり。

一、物子生れし処は二番町なり。殊の外平生摂生を第一に致され、はつたけまつたけ類の湿地に生ずる物を食し玉はざりしとなり。酒は杯にても猪口にても三杯を限りとし、朝は六よりして酷暑中にても単物を著、四つ時より帷子を著、七つ時よりして単衣を著、夜五つ時よりしては袷を著、夜行は堅くいたされざりしとなり。

一、徠翁の親方庵は、もと憲廟の御側医師にて法眼にまでなられしが、貞固直なる人ゆへ憲廟きつう寵し玉ひしが、同僚にそねむ者あり、色々讒せしゆへ、上総に謫せられたり。その時岩和田村の分限大野庄介が父庄兵衛が病気を治したるにより、此の方に滞留いたさるべしとて庄兵衛が方に久しく居られ、十二年の後召帰さる。方庵も亦召出さる。其前徠翁江戸に出らるゝ時易にて占れけるに、否の九五繫于包桑に云卦を得たり。桑は桑門僧徒のことなれば、是より増上寺の僧徒に講釈などいたされしとなり。

一、徠翁赦に逢て上総より帰られしとき、芝三島町豆腐屋の裏に居られ、其の頃殊の外貧しかりしが、豆腐屋の主より世話をやきたりし故、後郡山侯に仕へられしより三人扶持の米を一生右の豆腐屋に与へられし由、松崎子允語られしき。〔松崎子允名堯臣〕

一、春台は堀大和守殿家来にて、信州飯田の人なり。〔春台の父宿直の夜心疾をやめる婦人ありて、忽然として入来る。急遽の事なればその処置粗忽なることあり。父子是にて放逐せらるとかや。〕夫より京都に居られける時、東野とり謁せよと勧められしかば、江戸に来りて徠翁に始て対面せし時に翁の才を窺はんとて、扇面に釈迦と老子と並立ち孔子平伏せらるゝ図を出し、其の賛を頼みければ、翁直に筆を取て釈迦釈空老子談虚孔子伏笑と書ければ、太宰徠翁の才不可窺ことを喜び弟子となれり。

一、竹渓は三浦小五郎とて柳沢保山侯の扈従なりしが、学文あるにより徂徠にたより夫より南郭などと入魂し、保山侯の気に入しが、保山侯没後侯の気に入らず、何れも暇をとれり。夫より竹渓は中野に一類ありて暫居られしが、後松平伊豆守殿に仕へ亜大夫までにな

りしが、息子不埒ゆへ番の日も品川より帰らぬと云やうなることなれども、同類をば暇を出されても竹渓の子ゆへ扶持を減じ置れしに、兎角不埒ゆへ後には改易となりしとなん。

一、保山侯勢の盛なる頃、細川より毎日の進物の品十両以上の物なるゆへ、竹渓大量の人なれどもあまり夥しき故、墨君徽に問ければ、あれは其の筈なり、六万石のけてある由申す。松平左近将監殿執政の時、かせ板〔梨子煉つめ作る、熊本より献上なり。〕好物に付毎日のやうに贈られし。熊本にてかせ板ばかりに三万石のけて有し由、是に思合すれば、かやうの国風にて大諸侯のしるしなり。

一、柳沢保山侯の駒込の別荘に、六義園と云ふ額、徂徠に云付かゝせられたり。竹渓に見せられ、よく出来し由申されければ、竹渓云、悪筆なるが殊の外宜しき由申ける。其後徠翁に咄せしに、あれは其の筈なり、六義園の三字を唐紙四本に手習せし由申されき。

一、黒田豊前守〔琴鶴丹侯〕甚器用の人にて、神道を学び林家の学問もいたされ、又徂徠をも信仰いたさる。此の時南郭に徠翁の云れしは、丹侯は小松三位重盛に似たり、成仏はせぬ人なりとて、夫より小松三位と云れし。兎角成仏と云が大事にて、夫れを一途に思込ねばならぬことなりと申されき。

一、南郭はもと京都より歌にて柳沢侯にかゝへられしとなり。

一、東涯の方に松岡玄達北村可昌二人あつまりて、徠翁の天狗説を出して之を読み、二人殊に辨駁に及たりしに、東涯は黙してありしゆへ、二人これを問けるに、東涯曰、人各有所見は論をまたず。此文章の天狗の姿を云のべたること、いかなる人や及ぶべきとて、色を正ふして云はれしに、二人慚入て大に驚たると云。

一、南郭は謝安に似たる人なり。喜怒色にあらはさず、自らの見を立る人なりと云。

一、春台、黒田大和守殿より廿人扶持出入扶持を賜はる。大和守殿物故後、勝手あしくとて十口減じ、其の後又五口減ぜしかば、春台腹を立て、残りの五口共返上致され、一生処士にて終れり。息子保定は酒井左衛門尉殿に仕へたり。是も大夫水野勘解由〔水元朗也〕が世話なりき。保定不埒にて出奔し、後知れず。

一、徠翁の咄しには、木下順庵云れしは、大概三年の間二た時ほどづつ書物をつめてよめば、大概の学者にはならるゝ由云はれき。

一、山君彝は本仁斎門人にて、洛に在し時、訳文筌蹄を見て、夫より千里独歩して徂徠に謁せしとかや。

一、金華常に語りしは、我に学問は嘗てなし、然しながら詩文の上にては塩一升を一斗にも計るなりと云き。

一、郡山侯の君夫人、頗る学問を好み徠翁を尊信され、屡招かれて論語抔の講釈を所望いたされしに、不得已講釈いたされしが、後度々招かれしかば、女中方には箇様なること別して益なきことなり、女中は唯蛤のくちをあきたるが如にしてござればよしと申されしとなり。

一、学者皆覚のよきを願ふことなり。然れども覚のよきのあしきのと云は初学の内なり。博学になるほどさう〳〵覚へては居らるゝものにてはなし。此故事は此書にあるべし、是は類書にあるべしなどと、其穿鑿をする筋の書を知るほどになれば、何にても知れぬことはなしと、南郭云はれしと伯玄云き。

一、白石の詩は猿まはしの三絃のやうなりと、南郭云はれし由、恵明云き。

一、南郭の詩平仄宜しからず、平起有韻の句に初を仄に用ひたる多あり。それを春台の云れたれば、答に、唐にも折々あるよしいはれたり。春台返答に初盛中晩は云に及ばず、凡華本の詩集渡れば一覧して押見るに一首も其の法を犯したるは見ず。もし足下見当らば、一二首なりとも見せよとなりき。其の後南郭も守られし由三篇よりは見当らずと、伯玄咄しき。此こと春台の和書牘にもあり。

一、墨子は読にくきものにて、徠翁の考ありしを玉山が頭書にして、今の板をおこしたる由、灊水の咄なり。

一、徠翁平生云れしに、竹渓は定て人に叱らるゝこと有べし。我方にて色々叱ることを云人もあるべけれども、たへて申聞すなと云れし由。

一、徠翁軍学の師は八人ほどあり。諸流の皆印可までを取られたり。嘗て南郭をも勧めて木工源右衛門に入門させ軍学を聞されたり。南郭の咄に、徠翁は篤実の上に精力の違たる人なり。おれが聞てさへとろき謙信流などのやうな軍学を諸流己を空しくして能聞書などせられたりと、感心せられたり。

一、徠翁と軍法の贈答を致したる岡田彦左衛門は守山侯の家老を勤めしが、直視入道の気に背たる時一人扶持にて水戸に遣られ、其の後又家老に復職したり。尾州侯御不行跡のとき、隠居なさしめたるは此の直視入道と備前侯となり。

一、広沢はもと嵯峨広沢の池之村の人なり。最初馴染たる女ありしが、兎角志を立るものは江戸に出ねば立難しとて、千里独歩の思あるを彼女聞て同行を願ども肯はず、京都を立て二三宿も行と、彼女慕来れり。七里の渡をわたりて後、山路にかゝると、林の人気なき処に行て彼女を一打に打捨たり。志を立る者は格別の器量なりと南郭のいはれし、夫れ故広沢は一生無妻なりと云ふ。南郭常に春台と広沢とを称せられたり。

一、平子和は尤も奇を好める人なり。其の家一妾一僕あり。妾の名を月佐夜と云ひ、僕の名を染之助と云ふ。又極めて猫を好めり。猫次第に多くなり、十八疋に至りしと宮田子亮咄なり。

一、白石の師匠木下順庵自身は詩作一向出来ざれども、常に詩は唐の代の風が宜しき由教へられし故に、白石より詩の風体よくなりたりと、南郭語られし由、灊水咄なり。室新助、梁田三郎兵衛皆白石の同門なり。

一、板倉美仲は板倉九右衛門と云し旗本の子なり。兄弟三人あり。兄は佐兵衛とて武芸十八品の免状を得たり。その外諸芸に達し一仲節などはくろうとにも無き程にかたりけり。

甚不行跡の人にて隠居す。色々悪行あらはれ終に遠島せらる。美仲は学業により、徳廟の時三十人扶持給りけるが、後段々不行跡にて御扶持召はなされけるとなり。弟美叔と云も才子なれども是も無頼なり。

一、石叔潭詩会の時、いつも席上にて奇談やまず。嘗て席上の人、ちと談をやめて詩を案ずべしと云へば、叔潭答へて、是ほど面白きに詩が作らるゝものかと云き。

一、徠翁は極めて才を愛する人にて、塾中の少年客気に使はれ、娼家に遊び出奔したるをも、再呼戻して諫戒せられしこと度々なり。それ故徠翁を非れる人あれども、実は行儀をりつめたる人なり。行跡の方正なるを南郭蘭亭子允など口をそろへて同ことに語られし。世の人は是を知らず、放蕩したる如くにそしれる人有れども、其の後子迪よりも物子の行跡の方正なる話を度々聞けり。才を愛するあまりに板倉美仲などをもよく応対ありし。春台嘗て板倉の坐上に坐し甚倨なりければ、板倉辞して帰れる其のあとにて、あれは何人にて候や、羽折をきて礼服をもせぬ人を能くあしらはせ玉ふこと心得られずと徠翁に申されし由。是により板倉一生春台を非りし由。又た其の後竹渓浪人になりて甚見苦しき体にて護園に出入せしかば、春台甚だこれを厭ひて金谷を以て徠翁に申けるは、竹渓は寄せ玉はざるやうに致さるべし、あのやうなるものが出入いたしなば後生の輩の手本にも宜しからずと申させしかば、徠翁聞きて、彼は別に見所あるに因て先づ差置くがよしと云はれしとぞ。

一、春台は能の太鼓を余程よく致されし由。

一、庄内侯の臣に稲富又百と云ふ人あり。この名は徠翁にもらひし由、嘗て一夜に梅の詩ばかりを百首作り翁に見せしが、又た百首作りてみよと云はれしかば、又た梅の詩を百首作りて見せければ、徠翁その才を甚だ感心いたされ、是れより俗称を又百と改むべしと云はれし由。

一、筑波は、松平伯耆守殿藩にある時始て国より来る使者を五十間あたり口上書など受取たるに、其の口上名前残らず記憶して右の書付を置て出たり。同僚気遣ひ、帰て後残らず口上を云はせ見るに、少も違はずとなり。左伝などはそらにて覚へ居たり。講釈は至て上手にて浄瑠璃本など読やうなり。席上にて短文など妙にかきたり。一体雄壮にて剣術は余程すぐれたり。五十二三の由。

一、金華詩会の時、詩出来ぬとて雪隠に行き、暫して出来り、よき句が出来たり、名月と云ふ二字を考へたりと云ひき。

一、南郭、松前八兵衛より熊の皮と槍とを贈られたり。書を読て倦まれたれば其の皮を冒り槍おつとりて児輩を追かけなどして慰まれし由、風韻格別の人なりと文仲が咄なり。

〔安達文仲〕

一、蘭亭が父は日本橋小田原町の御魚屋なり。豪富にして芭蕉の門人となり俳諧をよくす。百里と号せり。病革なる時、原芸庵と云人を呼で辞世の句を作れり。紙筆をとて取寄せ、

死んでをひてすゞしき月をみるもよしと書き、暫して先に書かゝりたる時、芸庵のさうゞ〳〵しかりつるゆへ書き誤りたるとて、又た紙をとりて下の字をみるぞかしと書き改め、筆を投げて終わりけるとなん、甚だ豪気の人なりと云ふ。蘭亭も父の気を継ぎ豪気の人なり。

一、蘭亭、徂徠のことを論じて、南郭春台などを生出したる程の人ゆへ其量の大なること其藻鑑の逞しきこと実に及ぶべからず、誠に天授の人なりと存ずるなり。又た月の十六日詩会ありて門人帰途にて各今日疑を問しに、夢のさめたるが如くに覚ゆと語り合しこと度々にてありしといへり。

一、牛門の会の時、石川黙斎口をきゝてやかましければ、平金華黙斎不黙と云ひければ、金華無金と答へたりと、子祥の咄なり。〔山惟熊字子祥〕

一、蘐園に三河より出入の万歳来り、何ぞ書て給れと云により、鳥歌万歳楽と〔唐の楽曲の名〕云ふ五字を書〔是は三河にて岡部福太夫と云ふ万歳にて代々秘蔵せり。〕てやられたり。其の後持参して印を押てもらひしとぞ。

一、徠翁槍術の師は築地に住む深井半左兵衛と云ふ宝蔵院流の人なり。徠翁武芸の中槍術は一番長ぜりと、嘗て自身一つの手を撰出して如何あるべきとてつかひて見せければ、師大に驚て申せしは、別して宜しきことなれども、そのやうなる手は吾等家に殊の外秘め伝へずとて舌をまきし由、後其の印可の内に芸中王と云ふ手を徠翁撰ばれたりとぞ。

一、広沢は甚勇猛の人なり。柳沢侯に仕へし時大内新助と云ふ大かたりの浪人を柳沢家にて捕へし時、広沢に吟味のことを命ぜられ、後川越の領地に囚人を遣はせしが、この新助と云ふは大力のくせものにて、川越の領地に至り手錠をねぢきり網乗物をやぶり飛出したり。大力の武人ゆへ警固の足軽十余人を踏倒し逃んとせし時、広沢人数を退かしめ組打にして暫くせり合、仰のけに組伏せ、大足枷を打て手錠をかけ直し、足軽六人捕縄を六すぢにして厳しく獄中に入りたりける。其の夜新助舌を食切り自害したり。此の前川越の途中にても度々逃出んとせしを広沢よく守固したり。

一、中野辺に住たる処士に、源三位頼政の禁裏より下されたる太刀の由にて、太田道灌末とて持伝へたりしに、松平右京大夫殿聞及ばれ、広沢彼人に心安ければとて頼みて所望し取寄られたるに、取次の人の所為なるにや、後には一向しれぬことになりて彼什物持主に戻らねば、広沢も不審を受け、殊の外憤りて右京大夫殿を登城の節刺殺さん工夫をしたり。其事自然と保山侯に聞へ、止むことを得ず暇を出されしとなり。かの処士貧困ゆへ払ものに出したるを広沢より見せけるに、太刀も返さず、代物もやらざりける故なりと。

一、徂徠の徳廟に拜謁せられし時、初に雷のことを御聞ありしに、自分の疝気の起るやうにて何と云ふわけも知り難き由申上られければ、大に御笑遊されしとなり。

一、徳廟の時、加納遠江守殿有馬兵庫頭殿を以て六論衍義の訓点を林家に仰付られ候へども宜しからざる旨にて、徠翁に点つけ差出し候やうにと仰により、夫より六論衍義官刻仰付られ、其の外諸事御隠密御用、兵庫頭を以て御尋の内、火事の儀御苦労の段仰出されけ

れば、町火消の儀申上られ二三ヶ月たちて仰出さる。大岡越前守殿「いろは」組をたつ。又た夫までは小身の者大身の勤を仰付らるれば、其高御加恩にてありし、因て兎角親の勤を子に仰付られける。因て人才少きよし御尋ありければ、其の時役料足し高と云ふこと申上られしに、二三ヶ月たち仰出さる。是より小身の人の器量も顕はれ、諸家にても人才を取用ること出来たり。是の二ヶ条は不易の功なり。此以前憲廟の御代柳沢侯を以て御隠密御用仰付られしが、赤穂の士吉良を伐し時、死罪に刑定りたりしを、柳沢侯に徂徠申上られしには、君の仇を報ずること故切腹仰付らる可く存する旨申上られし故、夫より急に評定かはりて士の格にて切腹に定りたり。

一、憲廟の御代より徂徠召出さる可き御内意ありしが辞せられたり。後徳廟御代又た召出さるべき御内意ありし時、存よりこれありとて固辞す。其の後御目見仰付られ、其の翌年正月徳廟浜御殿にて御直に何か御尋問の筋是ある旨仰出されしが、其の月病中にて同十九日下世ゆへ浜御殿へも出られぬなり。此の年は結構召出され叙爵もいたさる筈の処惜きことなりと、徳廟御素読など申上し大嶋雲平〔後改故心〕の咄なりと、恵明本多章蔵語りき。

一、蘭亭失明の後、徂徠に就きて、今はかくなりぬれば如何ともすべからず、針を立習て生産ともすべきやと申せしに、徂徠暫く黙してありしが、いや〳〵夫は然らず、易を学びて筮者となりなんや、又た詩を作りて詩人となりなんやと云はれしが、又た暫くして、必ず詩人となるべし。聖人詩書礼楽の教の其の一つを得べきなれば是に勝ることやあると決断ありし故、詩を学んで只今は生産も貧しからず、又た後世に名も朽まじきと存ずるなり。皆徠翁の目の明かなるを以て教へられたる故なりと、蘭亭語りき。

一、蘭亭十七歳にて盲目となるわけは、もと肴屋の富家の子なるが、常に十六七歳の小座頭来たるが利根ものゆへ家内の気に入り、往々は世話いたし遣はすべしと両親とも思居たるが、如何のことやら蘭亭と中悪くなり、殊の外蘭亭悪まれ、どうぞして出入せぬやうにと工夫を廻らし、或時富家のこと故母が針箱に金子三両ありたるを蘭亭のいたづらに小座頭の道具の内に入をきたり。なにかな尋られたるに知れず、然らば召仕の道具を改めんと云に成ければ、小座頭は何の心もなければ速に改めさするに、其道具の内より出たり。因て其小座頭を呼び、其方に於ては此の如き悪行は有まじきものと思ひ、往々は世話をもして身の片付をつけやるべしと思ひしに、不届なる悪なりとて出入を止められたるが、鬱憤して井戸に入て死たり。其死せし日より蘭亭目をやみ終に失明せり。因て是は彼の座頭の一念なりとて治療のことをすゝむる人あれども肯はずとなり。此こと深く秘したるが老年に成て咄たりと耆山が咄なり。

一、南郭翁の煙草の歌なりとて、「糸に似て管より出す煙こそ富士や浅間の峯の白雲」と子順云し由。余按ずるに、郭翁は歌道達者の人なること前にもしるしてあり。是は郭翁の歌にてはあらじ、こそと云ふ詞のうけ字なし。若し南郭の歌ならば、愚按を以てせば、峯の白雲を雲と見らめとでもあらんか。

一、王維が、科頭箕踞長松下、白眼看他世上人（科頭にして箕踞す、長松の下、白眼をもって他の世上の人を看る）、と云ふ詩を南郭の他の世上の人を看ると点を付られたるを、春台「看他す」と点付べき由云はれしに、看他は俗語にてにらみ見るきみなれば、随分さう付るがよけれども、和語にて「他の世上の人を看る」と読めば句も舒やかに詩を読の法なりと云はれし由。又家語の註に、十五異粻と云ふことあるを、其儘にて増注は刻せられたるに、冬蔵其外なども是れは曲礼に五十異粻とあれば、十五は五十の顛倒なりと云ふ説ありしが、孝甫家語の聞書に十五とあるは五十の誤ならん、なれども十五より為人とて幼少の時の食物違ふと云ふことあるも知れず、古書残缺すれば見当らぬこともあるべければ、箇様のことは存して後の疑を残し置くが学問なりと、春台の口説にあり。さすれば蘐園の諸子の致し置れしことを、鼻の先の智慧にて非るは大なる過なりと文卿よりきく。

一、仁斎は殊の外京都をよく随へられたりと見えて、賤き者までも源佐殿とてどのつけに云ひたる由。

一、熊沢了介が近江に居られし時、或人馬士に道を尋しに、是より十里なりと教ゆ。其人それはあまり遠し、啌ならんと云ひしに、馬士こゝは了介様居らるれば啌などはつかぬ所なりと云ひし由。

一、松平大学頭殿〔頼寛字子猛〕人の来りて咄の時、徂徠と申せば、色を正くして其方たちなど徂徠と呼すてに致して済むべきかと怒られし由。

一、徂徠の先配は三宅孫兵衛と云ふ旗本の女なり。広沢媒妁して娶られたり。故に広沢は通家なれども、徠翁を度々凌ぎしことありしゆへ、後には余りつきあはざりしとなり。徠翁始て柳沢侯に謁せられし時、広沢披露す。此時書院に作り花の盆ありしが、此盆にて一首詩を献ぜられよと云ふ。作り花などの詩は古より作例もなき由徠翁申され辞せられければ、例なき詩を作るこそ才なり。例あらば誰にても作るなりと申されたるが、其座にて速かに作られしとぞ。後かやうのこと度々なる故交られぬとなり。

一、春台はむだ咄しするなどゝ云ふことはなき人なり。諸侯に会に行れても支度の上は直に辞し帰られたり。酒を飲にも一二杯には過ぎず、夜は四つ時を打てば酒を飲で直に臥せられたり。

一、春台或時諏訪町にて、去る大名の供廻りに溝に突落されたるにより、今にてもある蕎麦屋にて足を洗ひ、跡より追駆て其徒をとらへ、段々無礼を咎め、余程六つかしく云かけしが、諸侯方にて供頭出で姓名など聞き、浪人なればとて著換の衣服をあたへ、春台の小言を取揚ざりしかば、春台しぶ〳〵にふしやうしたりとなん。

一、徠翁七歳の時、林春斎宅にて掛物を読まれ、春斎甚感心せり。初は林家に入門せられしゆへ、林家の古き入門帳には徂徠の名もあり。

一、平子和は、蘐園の社中にて度々春台を侮慢せしことあり。会読の時議論するをりに、太宰の論を抑へつけ、確論がありても無理に虚談を交へて云ひ伏せこまらせたり。夫故平

生中悪く、折節は妄作に書籍の名を云ひ、妄作の語などを云ひ立て云ひ伏せ、春台熱くなりて其書を穿鑿し、二三日過ぎ足下の云ひし語は見へず、何の処にあると問へば、あれは我が腹中の語なり。足下のが実は確論じやなど云てなぶりし由。

一、徠翁は前にも云ふ如く才を愛して無行の人を棄てざること、伊藤一郎などは無行の人にて折々亡命して印肉を売ありきしが、道にて徂徠に出合、早々町のうらににげ込しを若党に追かけさせ、強て連返り手前に置れしとかや。

一、南郭も国初に文人なきに、深草の元政の扶桑隠逸伝は中々よく覚ゆると語られき。師徳ありて其時は生たる如来の如く人信ぜるとなん。此こと熊沢の書にも見へたり。春台の門人宮田了亮深草に往て其跡を見しに、元政の手書の和歌を掛物にしたるあり。「くち子只おり〳〵人の問くれば心にかゝる峯のかけ橋」とありとなん。

一、不佞と云ふこと、名を書かずして只不佞と書たるは司馬穣苴伝にあり。徂徠集に是を考に引たるを、叔瑟は国語の名の下の不佞を引たるとて灊水憤られしことあり。

一、灊水の祖父は宇佐美木工と云へり。其頃鴨根村のやひと云ふ所の分限石野孫右衛門が家に盗賊入たりしに、其娘長刀にて追散しける。夫を聞て木工女房に迎へたり。其女の髪の内に向ふ疵あり、其節の疵なりとぞ。此女髪殊の外長く立て居て踵まで届きしとなり。

一、筑波は市川団十郎と心安し。或時蘐園社中の書を団十郎もらひたしとて頼みければ、早速承知して皆己が贋書して遣りたり。又瀬川菊次郎にも頼まれしときも贋書して遣りたり。二人共に大に喜びあつく謝礼などしたり。文卿が咄には慶子が京に上る時、、春台南郭が筆に佯り送序を贈りたり。因て慶子進物を以て春台に行たれば存ぜぬことなり、憎き筑波が所為なりと云ひし由。此送序殊に見ごとに出来たりとぞ。

一、筑波は勇気の人にて武術もすぐれし人なり。武蔵野を通りし時、強盗四人出て剝取らんとせしを、一人むね打にして四人の賊とも取りひしぎたり。後其処を通りたれば村の者共出て時宜したりと、伯玄より聞く。

一、筑波、駒込にて舌耕したる時、書物はなし、唐詩選滄溟尺牘をば空にて説き、見台の上には浄瑠璃本艸紙をのせて説きたり。又た諸侯方に出講するに、大概書はいつも滄溟尺牘を見台に載せ空にて講ぜりと恵明より聞く。

一、灊水、考文〔七経孟子考文〕を助けられし功に因て古金七両を県官より賜りたり。是にて嘉靖板の十三経を調へたり。古金七両なり。

一、憲廟実録は保山侯報恩の為め徂徠に命じて編れしなり。其中憲廟の犬奴幷に殺生を忌れ玉ひしことは保山侯の勧めにて致されしやうに書れければ、保山侯徠翁に申されけるは、箇様の儀我が勧めにあらず、是にては如何と申されければ、徠翁云はく、君の過は臣下の受くべきことなりと対へられければ、侯暫く思惟の体にて実にさることも有べしと云ひ玉ひし由。右実録は郡山侯に有や否やを知らず。神明門前山城屋茂左衛門と云ふ本屋に二十巻は写したれども、跡十巻ありて未だ写し終らざりし由灊水に咄せしが、如何にして

写取りたりや審かならず。一年一巻都合三十巻なり。

一、徠翁常の咄に、人に得手不得手あり、予は楷書に短なりとて草書ばかり書かれたり。草書韻会を几上の研の下に置て常に学ばれたる由。

一、長門の周南の咄なりとて北条敏より聞きしが、徠翁の母、翁を産する夜の夢に正月の松かざりを夢みたり、因て父方庵生子を双松と名づけられし由徠翁にきけり。又た徠翁は生得雷を好まれたり。夫れ故若き時は蘇雷と号せられたり。此れは至て若き時のことなり。其後徂徠の松のこと幷に又たゆらの松徂来の松ならんと云はれて徂来と改められたりと、此れ亦た徂徠の咄に聞きたりと云へり。又た曰く、其後周南唐山より墨を入れし匣の内に詩画ともかけるあり。其画人を双松とありしを見れば、双松も和俗の文字とはみへずと云へり。此こと疑しければ後に宇子迪にかたりて正しければ、周南は年来徠翁に随身したれば斯の如きことも聞かれたらんと云へり。自分はしらずといへり。

一、白石に殿中にて、木へんに目と云ふ字は何と読と云ひたれば、答て、見習は又字なり定てもくと読むべしと云はれし由、是れは太平記無礼講かの処に見へたり。

一、富春山人は、大坂七組の番頭堀図書助の孫なり。大坂没落後乳母なる者其子を携へ軍用金を貨殖して医者になしたり。其子は田中寿軒とて松平筑後守藩に仕へ、今田中丈右衛門と云ものあり。富春は田中清大夫とて丈右衛門が弟なり。保山侯美濃守にて河越に在城の時より仕へ、甲斐の国主になられ、後郡山に所替の頃子細ありて立退たり。夫より一人東奥に下りたる時、徠翁の世話にて跡の闕所せられしを残らず武具馬具まで金にして、妻子〔啞のよし〕とともに東に送られたり。〔この時東奥の僧来りしにたのみて〕東奥に十一年程居られ、夫より池田に上りて死せし人なり。其時厳子陵を慕ひて富春叟と云ひたり。文は達者にて席上にて書かれ、東海漫遊稿などは其儘出来たり。書物は一冊も貯へず向より望に任せて記臆の儘講釈せし人なり、皆記臆したりと山子祥が咄なり。田省吾とはこの人なり。山子祥が父を平助と云ひたり。富春京都に行きし時委細なる道中記を貸したるに、三日目に平助参りたれば返したり。昨夜寝られぬまゝにそれを読み、記臆したりとて平助に読聞けしに、江戸より京都までの本陣名所賃銭まで一字も違はず、又逆に読むに少しも違はず、強記の人なるよし。

一、南郭初稿序に、徂徠吾家納言といへるを荻生少目のことなりと云ふは誤なり。少目は四位なり、納言と云ふは懐風藻に載たる石上乙麻呂を指していふなり。乙麻呂本姓は物部にて官中納言に至れり、詩の達人なり。故に小野篁藤原常嗣などゝ一ところに称せり。

一、徂徠病革なりしとき病状上聞に達し、徳廟よりうにかうる〔一角〕を賜はりたり。陪臣にて公儀より御薬を賜はると云ふは先格なきことなり。其死を甚だ惜まれしと云ふ。是れは学風の著述あきたらず、且つ徳廟厚く徂徠を用ひ給ひ、家をも興す可き御所存故、かく惜まれしと熊耳嘗て語りき。

一、徂徠疾病なりしとき嘆息して、予下世の後遺文世に行はれなんに、予を知る人は日本

にては東涯一人なるべしと云はれしと、松崎子允語りき。

一、藤東壁、柳沢侯を辞して江戸白山の小屋に僦住するとき、愛妓をつれ来て同居す。徂徠其居の辺を過らるゝついで立寄られければ、東壁狼狽して物置の内に其妓を忍ばせけるが、俄のこと故上著の服を屏風にかけてありしを気もつかず、うろたへて迎へけり。徐翁暫く物語して婦人の服あるを怪まれける顔色ゆへ、欺きて、小生の妹あり、宦へせるが宿さがりして此に訪来り、只今近所へ物詣しけると陳しければ、夫れはかゝる所に来られてはさぞ不自由なるべし、我等方になりとも逗留に越さる可しと云はれしが、帰宅の後其妹へとて酒肴餅餌など余り越されければ、東壁痛入て赧然たりしとぞ。此妓殊の外貞固の女にて、東壁亡後外より娶らんと云て勧る人あれども、一向取り合はず尼になれりとぞ。

一、服仲英もとは富春叟の門人にて、其後衣笠玄番と云ふ人に就て暫く修行す。仲英の集を蹈海集と号せしこと、灊水などの意には魯仲連伝の字にてよからざる字面なりと度々云はれたれども聞かざる由、後文仲に聞たれば、仲英が親は西の宮の神主なりしが、訴訟のことにて御構にあひたり。仲英出府して御詫申し、若し聞うけなくば蹈海而死とて江戸に出で、終に御詫叶て父赦に逢たり。是に因て此号ありとなり。

一、徐翁柳沢侯に仕へ保山殿没後加増ありて五百石になりたり。奉公もなく町宅せられ、先づ茅場町に住し、夫より牛込の外に移り、又た赤城の近所神楽坂に居られ、又た市ヶ谷大住町の中の町に住居せらる。此時青山より出火し、五段より巣鴨まで焼失にて回禄に逢はれたり。

一、徐翁は胴の長き人にて、小袖の丈は四尺を著られたれども袴短きよし。

一、春台は西台侯よりの書簡に号を書かれしより、無礼なりとて住ざりしとなり。

一、金華、春台に書牘を寄する時、うは書に金華山人と書てやりたり。春台兄弟の中にも礼あるべきよし云はれければ、成程と合点したりとて、又た文通に春台老賢金華と書きて、脇に片仮名にてこれではと書きたりとなん。

一、南郭の詩会に、清風不待秋と云ふ題を仲英出せし時、南郭仲英文仲など皆出来しに、士寧ばかり出来ず。其後文仲右の詩を士寧に相談せしに、士寧云はれしは、句題は作らぬことなり、畢竟詩は長きことを短く云ひ取るが手柄なるを、五字にて意味のあるを二十字四十字に云のばせば自ら冗句ありて詩情に背くことなり。唐人にも句題は少く、于鱗などもたま〳〵句題を作るは詩の衰へなりと云はれし由。

一、或時侯当世の名人を論じて云ふ、今日本にて学術は荻生総右衛門、伊藤源蔵、暦算は中根丈右衛門〔号白山〕、久留島喜内〔内藤備後守殿臣なりと云ふ〕、筆道は細井次郎大夫、官位装束は壺井安左衛門〔名は義和〕、神道は賀茂の梨木氏、俳諧は松木次郎左衛門、下りて戯台狂言は市川団十郎なりと。

一、熊本藩の藪久左衛門〔号を震庵と云ふ〕は肥後にて余程の学者なり。仁斎も果てられ、最早や徂徠さへ言伏せれば世にこはきものなしと思ひ、書牘など贈り江戸に出て紹介を以

て徠翁に来りしとき、徠翁座舗の掃除をさせて居られ、是に御通り有べしと云はれたるに、震庵それには及ばずと申しける。徠翁其許の為めに掃除いたすにてはなしとて、其後掃除を止め初見の挨拶に及び、さて其許には何役を御勤なさると問ふ。物頭役勤め侯と答ふ。徠翁、肥後は水国なれば御役儀にては定めて水軍の上も御功者にあるべきなれば追々御咄をも承るべしと問答に及ばれたりしに、いまだ学び申さずと答ふ。徠翁それは御頼母しくこれなし、然らば御役勤め難しと申ものなり。御役儀も勤まらぬ内、学問などは然るべからずと初よりきめつけられ、震庵もせり付心にて行かれしが、此一言にて迚も太刀打は叶ふべからずと甚だ心伏せり。其後は何にても徠翁の旨を得て事をさばきしに由り、殊の外肥後の風俗よくなりたりと右息子藪茂二郎咄なりと、鍋島の松枝善右衛門よりきく。

一、蘐園に仇英が桃李園の画と文徴明が賛の掛物を持来るものあり。徠翁見らるゝに、仇氏が画は正真物にして文徴明は偽書なり。価の高下は如何と尋らるゝに文徴明ゆへ高値なりと云ふ。然らば徴明をば返し、仇氏が画ばかり取る可しとて甚だ廉直にて買はれたり。後西台侯賛せらる。優游館にも小枝海鴎を頼みて此図を取たり。

一、蘐園に犬吠の達磨と云ふ画あり。兆殿司の筆なり。或時居間にかけて置かれしに、庭さきに犬来り此画を望みて大に吠しとかや、是より斯く申なり。画は達磨とは申せども実は臨済の像を画きしなりとぞ。

一、前段に云仲英は、親の冤を雪ぎて後修業して居たるころ、終に夜著をきず、厳寒の時も素足蒲団一つにて臥たり。此時は木綿夜具など買はれざることにてもなかりし故に不審したれば、親右の通り冤に逢うたるゆへ一生蒲団一つにて極寒をも過ぎたり。それを思ふゆへ蒲団ばかりを著るとて、赤羽に行きても一生夜著をばきざりし由、感ずべきことなり。

一、滝弥八は屈彊の人なり。彫刻某の印譜を得たるに、華人の序甚だ読み難く、南郭仲英などにも見せしが読めぬ由にて置たりしに、二度目に仲英韻をもたして詩の如く読みたればよく読めたり。夫れを弥八に見せたれば負をしみにて、詩にすれば随分読めると云ひし由。

一、林周助〔義卿〕は周南門人なりしが、徠翁と周南の文通を己と徠翁との如くにして印行したり。夫を南郭と春台と松平摂津守殿いまだ民部少輔にて参政御勤ありしとき、願書を以て廃板したりし由。此願書は恵明持たりと世龍云ひき。周助娘は松平周防守殿妾に抱へられ甚だ寵あり。之に因て周助総領を用人宮城治郎左衛門が養子になし、侯執政の時専ら勢要の人なり。宗徳時にあひき。

一、烏山侯は甚だ詩を速に作られし。文仲彼是八人が召されたる時、席上の題の外八人に贈る詩七律八首、其上に八人の和韻をいたされたる由、甚だあらき詩なり。壺山侯〔本多弾正〕はよく考へたる人の由、皆蘭亭門下なり。烏山侯は鶴楼の門人ゆへ師弟のあしらひにてはなく、食客のあしらひの由文仲咄しき。

一、鞍岡文次郎、名は元昌、号蘇山、長崎の人なり。総髪にて容貌甚だ異なり。華音をよ

くす。或は長崎の訳者の子にて華人のをとし種なりと云ふ。十九にして江戸に来り、徠翁推挙にて柳沢侯に仕へたり。其時年は二十六なりと申けれども実は十九なり。初め長崎より町家の手紙をもらひ、江戸の豪家の町人に向けて参りたり。この町家にて手紙は相違なけれども、容貌を見て怪しく思ひ、一宿をも致させ申ことならず、又た明日なりとも御出候へと云ひしに、より拠なく馬喰町に宿をかりて居たり。幾日もなにもせずにゐたりしが、亭主見兼て何ぞ覚へて居られ候ことありやと申しければ、何も手に覚へたることはなけれども、只手を少し書と申せしゆへ、然らば書てみせ給へとてかゝせたり。亭主殊の外悦び、夫より手をかゝせて業とさせしとなり。其後徠翁門下に遊びて居るを聞き、手前屋敷なりとも出られよとて保山侯に薦められしとなり。徠翁墓石の正面は此の蘇山の書なり。

一、柳沢侯の藩に牧田文蔵と云ふ人あり。天文算術を能くす。灊水三島町に居られしとき、南郭盛なりしが南郭方に行かず、吾方に入門したしりとて灊水秘蔵せられたり。

一、竹渓灊水の句読ある書に句読せられたるを、春台愚なりと笑ひたり。竹渓きゝて、其句読の上に句読するばかりが即ち見こみなりと云ひし由。

一、徂徠の墓石は伊豆の小松原と云ふ石にて、蘭亭の註文なり。石面彫刻の時、蘭亭毎日石工の許に行き模索して、此が深し彼が浅しと恩を報ぜんが為めに責付たれば、石工も大に迷惑がり蘐園に訴へしが、それは先子に故ある人ならん、此方より言ひ難しとあれば迷惑ながらほり上げたり。夫れ故深過て法に外れたる由。

一、徂徠真蹟の政談を本田文卿借得て写しき、誠に感心す可きものなり。是は立花宗立と云ふ人、茶屋四郎二郎に廿一両にて世話せしを、京都にて百両の質に取らんと云ひしを四郎二郎やらぬとなり。四郎二郎が清水の勘定奉行池田作左衛門借得たるを文卿借りたり。灊水嘗て此書を見られたれども、価貴きゆへ買はざりしとの咄なり。

一、学則附録の内竹渓に与へらるゝ書は実は芸州の屈景山に答書なるを、景山より、是れは本集に入れられ下されまじと頼みに付き、竹渓と謀り竹渓の名にせられたり。竹渓は理学はせぬ人なり。

一、宇士新は学術の奇僻なるのみならず言行ともに詭激なりと、士新のもとに度々行かれし人の咄なり。然れども是非とも一家の言を立つべき志にてありし故、甚だ精学は及び難きと云ふ。今の平安の学士は士新の奇僻に浮華を配剤したると存ずるなり。蜷川文蔵など以ての外奇を好める由、最も学術は又た中々人にすぐれたりとは存ずるなり。

一、国策は人にすみ難き由を云ふ書なり。春台の方に会あり。是は戦国遊説の士言廻りたることなれば、兎角口上にて云て見たらんには済むこともあるべきとて、各本文の通りを今日の口上にて云て見たる由。それ故すむ所すまぬ所はきとわかれたると君修語れり。

一、金華はをどけたる人なり。呂不韋伝の嫪毐を「きうあい」ではなし「ろうあい」だと云ふ争あり。金華側より不佞はきうどくと覚えたりと云へり。毐の字毒の字に似たる故なり。

一、長松寺徂徠次嬪佐々氏の墓は馬鬣封のかたなりとぞ。

一、春台が校せられたる書は、片かなの点一画わづかに誤りたるも悉くすりけし、もとより点の悪しきは残らず改めて句読正しくして字義のまぎらはしきは皆標注し、又た注などの義の誤を正し、評をも標題にして批点もあり、五色のすみにて右の通なる故五色に彩色したる小紋の絵を見るに似たり。誠に珍しきことなり。古より斯の如く精密に書を見たることは類ひ稀なり。又た赤馬関石の研に五つ並びたるを持て、五色の墨も自制して用ひられしとなり。享保十七年壬子に、徠翁の遺文を南郭校合にて一二巻づゝ分て、徠翁の門人に浄写ありしとき、春台峡中紀行を受取りて書かれしに、一字一画の書き損じもなかりしとぞ。

一、南郭は十四のとき元禄丙子東都に至り、十七歳の時柳沢侯に仕へられたり。大東世語も其の比専ら日本の書を読みて書出しをきたるを、後に刪定して書なをしたるなり。日本の古北条氏の盛なりし時の詞つき、晋のとき門地を貴びたるに似たり。それをかきたる故史漢などとは文体たがひたるなりと語りき。老て京都に遊び、帰て後居間のをし板の壁の中央に箕尾の滝を画き、左の方に薩陲嶺より海を眺むる景色を画き、四稿に載る七言古詩もかたはらに書てあり。絵は全く雪舟流なり。常に語りて、日本の画は古法眼雪舟を最上とすべし、異国より来れるとて人の賞する八種画譜は、日本人の所謂町絵にして見るに足らず。画論は津逮秘書中にあるにて推すべしと論ぜられき。又た神戸侯の別業うきす屋敷にて庭を廻りて、数十年歌をよまざるにふとよみたりとて語られしは、「静なる池の心を水鳥のうきすの浪のたつともなし」是れなり。

一、徠翁竹渓に語られしは、鈐録とは号けたれども、冉牛が兵と云ふことあるを以て冉矛と題せんとも思ふと云はれしと、灊水の話なり。

一、徠翁人に接するに士人に非れば堅く同間に入れざりき。故に蘭亭なども屢出入せしかども、御魚屋の子なれば一間づつへだてゝ教授致され、見舞などに来りしときは玄関にて逢てかへされしが、後明を失してよりは士人同様にあしらはれしとなり。

一、憲廟は御威勢ありし御方なり。威福の二つは人君所以執御下也と徂徠云はれし。叔達など登城の度々挟箱に一杯づつ拝領物ありし由なり。

一、憲廟の時柳沢侯への贈もの多き中に、最も華美なるは熊本侯にて、或日大鯛の一分も違はぬを五百枚進物とせられたり。

一、徳廟の時、酒匂川の水溢れければ、川崎の田中丘隅〔後勢を得て御代官の御あしらひにて大岡越前守殿のかゝりなり。〕水を始めて酒匂川の川上に禹王の碑を建て、此の碑文を丘隅自ら書いて大岡越前守殿に出す。則上聞に達し、総右衛門に相談すべき旨仰出さる。越前守殿より徂徠へ奉書来り、右の趣仰渡され、中一日ありて右の碑文大方書直す程にして差上られたり。其の時灊水供にて越前守殿屋敷に行かれしとなり。其の中に「勢田判官為兼奉勅命治水立神禹廟於鴨川」と云ふことあり。何より御出候やと南郭問はれければ、

前かど雍州志〔並河五一著〕の中にて見たりと云はれき。此の碑をば竹渓かきたり。丘隅方より徠翁に書いて給はれと申も餘り失敬なりとて、門人の人に頼みたしとありければ、即ち竹渓に慰ながら書れよとて託せらる。

一、徳廟の時、黒田豊前守殿を以て政事の儀認め差出すべき旨仰出さるゝに付き、太平策を書いて上られしが、加納遠江守有馬兵庫頭両人の手より出しゝよし。

一、度量考を印行せらるゝ時、算に校合たのまるべしと竹渓云はれたれば、徠翁少々違ありても苦しからずと云はれたれども、無理にすゝめて中根元珪に頼まれたり。二ヶ所たがひたる由にて直さる。其の後上総に又た箇様々々の算者ありて妙なりと元珪より竹渓に咄しければ、竹渓夫れは大方馬鹿なるべしと云ひしよし。此の語殊の外面白きことなりとて灘水の咄なりき。

一、甲州猿橋宿の人、徠翁甲州道中致されしとき書を貰ひたる由、何とか云ふ二句の書を持たり。此のわき書を灘水に見せたるに、書は真蹟なれども印と款識とは疑はしき由言はれたり。熊耳の考へには、落款は甲州道にて此の二句を得られたと云ふことなるべし。印なくては如何と有合せを押たらんと文仲いひき。

一、徠翁平生書を読まるゝに、机案を用ひず、唯腹ばいになりて読まれしが、人に申されしも机案を用ゆれば頗る厭倦を生ずるものなれば、用ひぬがよしと申されたり。

一、春台、竹渓に逢ひ、道は行はれぬ世の中になつたりと云ひしが、竹渓別かれて人に告げて、春台は此の節大分ひもじいめに逢ふと見ゆると云つて笑はれたり。

一、竹渓は徠翁の著述ものを多く写せり。浪人の頃筆耕料を取て書きたり。護園に今存せる二辨学庸解鈐録論語徴など皆竹渓の書なり。詩文は大分竹渓に書かせしことありしとぞ。鈐録は十五日の間に全部皆写しをはりしとなり。徠翁常に竹渓は至て頓筆にて謄写速に、其の上脱落誤写等もせぬとて多く竹渓にかゝせられしが、鈐録には驚かれしとなり。

一、竹渓吉田侯に仕へて広間の役を勤めしとき、郡山侯の使者塙亘と云ふもの参りしに、旧故をだん〳〵語りし上広間にて大音声に、そちらの屋敷は馬鹿な屋敷じやと思うて辞したが、こちらの屋敷もやはり馬鹿な屋敷じやと申せしとなり。

一、竹渓吉田侯にて亜大夫になりたる時、春台途中にて逢ひ、足下此の頃侯に用ひらるゝと承りたり、定て経済の了簡も出べし、目出度しと云ひしに、竹渓行き過ぎながら、大馬鹿ものなり、只口を餬するまでなり、何ぞ経済などせんとて仕へんやとて、大きにそしられし由。

一、竹渓は豪邁の人なり。青山辺の野に友人とつれだち行しとき、道にて乱暴ものに出逢ひ、刀を抜き通る人に疵をつけたり。往来の者も友人も皆避けたりしが、竹渓一人はなうた歌ひながら近より切りつくる刀を扇にてうけ流し、刀を打落して搏へたりと、灘水の話なり。

一、南郭の詩に、白鳳宮と云ふは近江の白鳥〔日本武尊、白鳥に化したると云〕明神を祭

る社のことなり。

一、南郭老年文字をやめられし時、緑山の龍泉〔蒼溟上人〕硯の銘を好まれしに、左候はゞ倭文を書きたることなけれども倭文にても進ずべしとて、檜垣の瓦硯の文を書かれし由。此の真蹟金地院と龍泉とに二枚あり、藍川通益順双鉤すと云ふ。此の服子の手跡は順閲が方に所持す。

一、仲英はせうたんな人なり。鳥羽侯藩に青柳清大夫と云ふ人あり。学問も左までなけれども、詩を好みすこし作り覚えて詩会にも出でたるが、字を付てもらひ度由仲英に乞ひたれば、子厚と付よと云ひたり。固より不学ゆへ柳柳州なるをも知らず居たるを、同門の人柳子厚先生など云ふてなぶりたり。後に外にて聞き大に困り字を加へて貰ひしとなり。

一、河保寿は物いまひの人なり。是も仲英に目出度字をと乞たれば、詩経の桃之夭夭と云ふ字を以て子夭とせよと云ひたるが、後に子昌としたりとなん。

一、郡山侯の大夫に薮田五郎右衛門と云ふ人あり。或時徠翁と面談の時、兎角炭部屋と云ふ仕方が大事なりと云はれしに、炭部屋の仕方とは如何なる仕方なりやと問ふ。徠翁答て別の儀にも候はねど、一体人才を用るには上に目立候人ばかりを用ては役にたゝぬものなり。それと同じことにて、炭もやはり下積に能くしめり候ものありても、兎角上かはの乾き過ぎたるのばかり用申すものなり。夫れ故かくは申なりと云はれし由。

一、本艸に五十箇条の口伝、十五箇条の秘事と云ふことあり。京都にては銀一枚づゝならでは口伝を許さず、其内に「莫令四目之人視」と云ふことあり。錬丹法かなにかを見せるなど云うてあり。是れを松岡玄達の伝にては、壊孕之婦人のことを四目と云ふ。又た何某とか云ふ人の伝には、方相氏は逐鬼形にて葬礼などにも先立するなど云ふことあれば、見せぬと云ふことの由云へり。徠翁聞て大に笑はれ、右様のこと何の拠もなき猥説なり。四目とは我与人のことなり、錬丹の法を人に見せるなと云ふことなりと云はれて今は此説になりし由、石塚元文咄しなり。

一、南郭文集の内二三箇所転倒ある由、滝長愷より申越せしことありとぞ。

一、答問書の問をかけし人は、酒井左衛門尉殿の大夫水野弥兵衛疋田族と云ふ両人なり。其俗書牘の問書蘆園に存せしを見たり。

一、蘆園にある世説の古本は東壁の所持にして外題は東壁の書なり。

一、遺契〔南郭著〕は大塩与右衛門が本にて校合したり。其後備前の湯浅新兵衛点を付けたり。灘水に見せたれども気に入らぬとなり。

一、蘭陵田良暢は田中丈右衛門子にて、清大夫の猶子なり。入江幸八はもと筑後侯の歩士の由。

一、水足博泉は熊本にて父屏山密夫に殺されしとき、父の仇を討たんとて熊本侯にねがひ、侯よりも許されて仇をさがし備前まで出しが、道にて病つき狂気して死したり。此時二十三歳なりとぞ。

一、松井助七、字を子潤と云ふ。彦根侯世臣なり。彦根にて徠学を弘めしは此の子潤と武子忠との両人なり。頗る学才もある人なりしが、彦根にて遠松源五郎と云ふものと同藩にて屋敷も隣なりしが、或時憤ることありしと見へ、源五郎を召寄せ坐定ると斉しく子潤刀を抜き源五郎が右の手をきり落すに、源五郎もさる者ゆへ左の手にて刀を抜きすかさず子潤の眉間に切りつけたり。其向ふ屋敷に夏目外記といふ大夫あり。此時年十六なり。此騒動を聞より、早速駈付て門を打たせ近辺より来る人を入れず。門を敲く者あれば外記呼はつて云ふ、喧嘩にて候程に外記是にて勝負を見届候。必ず御立入あるなとて、人を拒み源五郎を其子に渡し子細を糺して届を出させしが、其さばき少年にはすぐれしことなりとて彦根侯に誉れありしとなり。此外記も学問餘程ある人にて、徠翁を信仰いたせし人なり。

一、池永道雲の子は宗右衛門と云ふ。宗右衛門は黄金家にて、芝口二丁目のてれめんていこと云ふ薬を売る。大坂屋七兵衛の株を買ひて今にあり。

一、長於詩書〔孫奭孟子題辞〕などの長は「長なり」と読むべし、其得手たる所を云ふ。不得手を「短なり」と読めばそれに対して「長なり」と読むべし。「長ず」と上声のやうに読むは宜しからずと灣水云ひき。

一、叔達嘗て奴隷の罪あるを逐はれしに、甚憤り叱りて逐出せしかば、方菴これを聞て徠翁に戒められしは、逐へば我が臣に非ず、何ぞこれを叱するに及ばんや、叱するならば逐はぬがよかる可しと云はれし由、徠翁の咄なりとぞ。

一、徠翁の外姑〔佐々氏〕は備前新太郎少将殿の後宮に仕へ居られしが、後には仕をやめて娘〔徠翁次嬪〕方に寓居す。徠翁これに事ること実母に事るが如く、朝昼夕三度づゝその居間に至り機嫌などきかれし故、餘り厚く取り扱はるゝに困り居られたりと大寧の咄なり。〔物道済号金谷〕

一、徠翁の祖母は北条氏政の侍大将平山参河守女なり。家に畜生はかはぬがよし、若しかふならば、犬一疋かふべし。又た下部を侍に取立て使ふことよからぬことなりと平生語られしと、徠翁咄されし由、蘭亭咄なり。

一、肥後の学校は二の丸の中にあり、秋玉山これを掌どる。玉山はことに豪飲にて磊落の人なれども、三年の喪をつとめたるなどは人の及び難きことなり。

一、大和を日本と云ひしは唐の則天の付けられしよし文仲云へり。

一、室鳩巣はもと加賀の人なるを、白石の推轂にて県官に召出されたり。

一、予嘗て柳沢侯に存せる徂徠親類書と云ふものを見たり。尤も翁の真蹟に疑ふべき所もなきものなり。翁の高祖父に参州荻生城主長享二年彼城明渡属于北畠大納言卿房卿四位昇進仍打目といへりとあり。打目疑はしければ何と読むべきと社中の人に尋ねしに、打目は少目の誤なる由。

一、徠翁牛込の出火の時、人数六七人召連行かれしことあり。十人火消殊の外悦び使者にて謝しけるとなり。是れは翁の指靡に目を驚かすことありと見へたり。

一、安澹泊、水戸公の命を奉じて烈祖成績を著はす。其序守山侯の文なり。〔南郭代りて作れりとの咄なり。〕烈祖成績は神祖御一世の実録なり。文は叙事を第一として間々議論あり。此れについて一つの佳話あり。本多中務大輔殿執政たりしとき、水戸の邸にいたり、此書を拝借あらんことを有司にたのまれけれども、中々外には出すまじき由預め定められたることなれば、決して此事は申出すこともならずと申す。其翌日又た本多侯水戸の邸に至りてたのみあれども、取次の人も曾て取合はず、又た其翌日に至り、中山備前守殿に相見ありて縦令ひ思召に忤ふとも、此事達て願ひ奉るときびしくいはれしにより、水戸公開き給ひ、今執政の大臣日本に重き人なり、日に事多き中に来りて望むこと黙しがたし、只五日の間かすべきなりとて御借あり。本多侯物よく書く人を十人選みて五日の間に写させられしとなり。今は世に漏れてたまには外にもあり、千五百張もあり。

一、無題と云ふ詩は劉禹錫が創めたるなり。是れは古意のこゝろに作るべしと瀟水など云はれしが、唐詩選にある古意は女の男の遠游を思ふ心、又た明人の無題の詩は兎角男が女を思ふやうに作てあるなり。又た仲山の云ふには、古意は古詩の意と云ふこゝろにて、古詩と指すは十九首のことにて、十九首の意と云ふことなり。十九首は皆女より男を思ふこゝろなり。南郭の説なりと、然らば男の女を思ふ意にてはなきか。

一、学則に黄備と書かれし黄の字、瀟水などもとくと知れぬ由云はれたるが、三才図彙草穀に本草を引て黄薇と書きたり。往古吉備の中山よりわらびを出したり。黄は薇の本色と云へり。文仲が詩にある由文卿の咄なりと、叔飛つたふ。又た和学者云ふには、古歌に「真金ふくきびの中山」とつゞけたれば、真金ふくきとかけて、此のきは黄の字にて黄備と書きたるべしと云ひたる由、藍田の説には黄備に作れるは訓を借りて憲廟の御諱を避くるかと云へり。〔藍田伊東金蔵〕

一、白石は生涯弟子をとらず、烏山侯〔大久保伊豆守〕弟子たらんと頼まれければ鶴楼に譲りたり。鶴楼遺編は烏山侯の世話にて印行せし由、序は清の鄭任鑰室直清にて南郭撰文の伝あり。鄭任鑰は白石餘稿の序を書きたる人なり。

一、白石ある豪富の町家に行きし時、主人今日はよきおりにて只今に徂徠も参りもうすと云ひしかば、白石匆々にして帰られたり。跡にて徂来に出会しては中々むつかしきゆへ避けたりと云はれし由、文卿の咄なり。

一、町家にて惜むべきものは、市野屋三左衛門〔春台門人、周易反正校合の人〕井上源蔵〔同門の人〕万屋作兵衛〔俗語をよく解し、水滸伝に仮字を付し由、瀟水にも謁す。〕の三人なる由瀟水の咄なり。

一、芝の伊勢屋嘉右衛門と云ふ豪家は郡山侯の仕送をせる人なり。其弟の清左衛門は倉前の米屋にて是れも豪家なり。学問す。兄は郡山侯より徂徠勉書并に墨跡に猗蘭侯の跋あるを借用にて、清左衛門にかしたるを春海見せたり。憲廟実録も三十巻とやらあるを借与せしと咄なり。

一、徂徠集四家雋の初の一二冊は大久保四丁目の御家人洲中彦五郎書きしなり。此男は学問はなけれども、手跡宜しきにより竹渓など世話いたされしとなり。

一、岡島援之は長崎の人にて、華言を能くするに因り、其節は柳沢侯にて唐僧など応対多きゆへ保山殿抱へられし由、徠翁華音の師なり。長崎にては放蕩の人なり。華人の海鼠を海参とて尊むを以て交易せんとて金をとり海参をばやらず。夫より江戸に来り、其後妻を自分が中人して外に嫁せしめたり。此援之が子の由にて書生たりしを市橋伊豆守殿抱へられたり。絶句解の證とやら云ふものを書きたるを灣水に見せたれば、此人は人と為り心得ずと云はれしが、言ふに違はず其後市橋の奥女中と密通して出奔したり。此事に付き熊耳甚だ迷惑せしとぞ。

一、金華、徠翁を訪はれしとき其不在にあひ一聯をとゞめて去る。聯に曰はく「夙起錬丹、紫気在于窓前、暮帰炊玉、青鳥下于簷下（夙起して丹を錬り、紫気は窓の前に在り。暮帰して玉を炊き、青鳥は簷の下に下る）」金華一時の戯作なりと、灣水の咄なり。

一、徠翁外より書籍をかりに来たれる人あれば其儘かされたり。若し出しやう遅ければ殊の外怒られ、吾が書を見たきも人の見たきも同じことなりと云はれし由。

一、柳沢侯勢の盛なる時、名ある剣術師来り使者の間に居て徂徠を見、取次の者に、只今肩衣に丸に矢違を付けし人此の前を過ぎしが何と申す人ぞと尋たり。それは大方荻生総右衛門ならんと云ひける。剣術師云はく、不思議の人なり。先刻より二度ほど見受候に、心に少しもすきのなき人なり、後よりもうかつには打ちこまれぬ人なりと云ひし由。

一、板倉美仲は別に召出されたる人なり。才気世にあらはれ上聞に達し、藪主計頭を以て御試み仰付けられしとき、美仲より韻字の内いづれの文字にても五字づゝ御書き出し候はゞ、律を作り御目にかくべき旨申したり。主計頭学問なき人ゆへ、何の字の差別なく書付けたるを、直に律にて幾首も作られしを御覧に入れ、夫より召出されたる由、灣水より聞きたり。

一、徠翁礼のことを教へられしには、宮室門戸其外共皆小さき木にて雛形をこしらへ置き、仕方をして見せられたり。

一、徠翁没後、抹香に数多矢の根をつめ置かれしが出でたる由。又た広沢藩を去りし時、徠翁好みある人なりとて弟子たちを遣はしにがしやりしに、箪笥甚だ重くして動かし難ければあけてみるに、鉄砲玉数多これありし由、皆治世に武事を忘れざるたしなみとぞ。

一、竹渓終焉の時、自分の草稿を皆取り出して片紙隻字ものこさず焼きすてたり。夫故著述は何ものこさぬとぞ。

一、竹渓、徠翁没後忌日には急度徠翁の神主に謁し、手製の菓子などを備へし由、灣水の咄なり。

一、竹渓は活気の人なり、徠翁の虫干の時いつも竹渓手伝にきたり。晒書のとき裸体にて昼寝をして庭先に居たりしを、徠翁窃に見て起されて申さるゝは、地気をうけては能くあ

るまいと云ふ声に驚て飛び起き、腹の晒書の世話まで致したりと云ひし由。又た晒書の時笈中に折節其書籍なく、名ばかり蓋にしるしてあるとて、ない書籍を記して置くは益なきことなりとて消してしまいたり。徠翁是れを見て、これは迷惑なこと、折節他に借して置きしなり、必ずないのではなしとて笑はれしことありとぞ。

一、錦里の門に才学勝れし人の集りし時、人々の志を聞かんと云ひしに、白石と榊原玄甫と両人すゝみ出でゞ、日本有用の学問を仕度存ずると答へたり。白石は古史通、藩翰譜、読史餘論、東雅、軍器考等皆日本有用の書を著はせり。玄甫は法律の学問骨折りしに、紀州は法律のはやりし国ゆへ紀藩に召出さる。徳廟も紀州にて法律のこと御存知あらせられし故、江戸御入営後も御吟味あり。徠翁叔達も専ら法律家の言吟味これあり。明律国字解も出来の由、徳廟又た三奉行に命じ県断録を撰ばせられしとぞ。

一、白石折たく柴と云ふ著述書二冊あり。是れは後鳥羽帝の「思ひ出づる折たく柴の夕けむりくせふもうれしわすれかたみに」と云ふ御製にて名づけし由。これは文廟に申上げられし由を詳に書きたる故、外へはかたく出さゞる由。

一、徠翁の和歌とて云伝へしは「わが門の五もと柳枝たれて長き日あかぬ鶯ぞなく」、又た「わがやどの五もと柳糸たれて長の日飽かぬ鶯ぞなく」とも云へり。

一、徠翁の方に人来りて、庫一つに盈る書籍を売る者の候、購ひ玉ひなんや、価百六十金なりと云ふ。徠翁予求むべしとて、家器武具をばのこし、大方払物に出し畳をもあぐる程にして価をやられたり。其中に種々の書あり、詳に子迪より聞く。子迪は物子の方に十七八の比居たる由。尤も其の購はれたるは徠翁三十九か四十歳の時の由、子迪が物語なり。それ故徠翁殊に書籍に富まれたり。其中に李王が集もありて、古文辞を修せられしことそれよりなりとぞ。

一、山田大佐は、十三歳の時無点の書物を読むとて県官より二百石を給はり、博士の員に備はりけるとなり。

一、徠翁政談の末に二首の和歌あり、「まめに問はん便りもがもな孔子の道をたが世の為に伝へをきぬる」と、「古への文のまきくみれどくいづれわが世のすがたならざる」

一、蘐園随筆、訳文筌蹄は見識未定時の板なり。定りて後は学則答問書印行す。是れ皆徠翁存在の時の板なり。二辨論語徴は南郭春台竹渓等門人校正して印行す。学庸解よりして子迪の校正なり。

一、五史の点は、柳沢侯の臣志村三左衛門と云ひし人、徠翁と同じく点をつけ、書肆松会三四郎刻す。三四郎は大のやましにて、保山侯の勢ならば諸侯にもうれやすからんとて二十一史を印行せんとせし由。五史は晋宋南斉北斉陳なり。

一、二辨論語徴学庸解は徠翁暗記のまゝかゝれし書なり。山井善六に出処突合を頼まれ、春台南郭はいそがし、金華は健忘のやうなる者なり、足下ならではたのむ人なしと云はれし由。夫より右の書とも写取り句読などせられしが、其内に紀州に帰省せんとて発足した

る時より腫物にて不快にありしが、程なく在所にて物故したり。徠翁より七日後れて死せしなり。夫故校正は南郭春台の手に成り、道具などうりて金にして在所につかはせしなり。此善六は根本八右衛門と足利の学校に居て七経孟子考文を編せし人にて、精密の学問なり。

一、春台嘗て社友に語て、善六が今まで居たらば餘程六けしき学者になりたらんと云ひし由。

一、石台孝経は唐の玄宗墨跡にて石本板葮園にあり。是れは華本を徠翁双鈎にとりて東壁これを彫すとかや。嘗て河保寿灊水に乞うて二本を搨り、一は己れが分とし一は灊水に贈る。其後鳩谷搨らんとしたる時偶々葮園より取り返されたり。灊水大きに困りしと、子昌咄しき。〔鳩谷、天愚孔平〕

一、書を読んで眼光紙背に徹せざれば快からずと徠翁云はれし由、竹渓の物語りなり。

一、南郭の画ける三十三番の観音は、原本宋画にて外より見せに来りしを写せし由。没後遺物として縁山の忍海に仲英より贈り、忍海没後払物に出たるを青山百人町の著山と云ふ者買て少林院に納めしとかや。少林院にて毎年六月廿一日詩会の時これを掛けたり。

一、南郭遺言にて墓碑銘墓誌なし。因て四編の末に水戸の楽山公子の文にして、仲英が大概を書けりと灊水の咄なり。

一、いさ葉と云ふものは草木の病なるべし。それを好む人情おもひやるべし。松などは本色を失へりと南郭の咄なり。

一、訳筌示蒙は分けずにとぢ、示蒙の方は先にある由。〔手沢本〕訳筌は板刻の本同じことなり。其後殊の外増補あり、中には省略もあり、示蒙も其まゝの由、因て板刻の本は宋学の見をまぬがれざることあり。

一、葬礼略はもと徠翁唐紙にすつと書いて置かれしを、灊水写し置きて、題号もなければ葬礼略と書き置かれし。其後南郭書目を書かるゝ時灊水かくと申しければ、あれはあの通りにて然るべしとて右の名となりたる由。

一、徠翁へ南郭の云はれしは、「世の中よ道こそなけれ」と云ふ歌はどうも読まれぬ歌なりとて賞美せし由。

一、南郭公儀のことを漢文にて書きしが、此事にて殊の外難儀ありし故、是より一向経済を云はず詩文ばかり専らにせられしなり。此記録末年焼捨んと云ひしを子寧預り置き、其後窃かに跡を書かれしと穀山云ひき。

一、徠翁書籍を購はるれば春台直ちに端書を致されし由。

一、徠翁外より来る書翰をば一纒めにして一度に返事を書かれし由。

一、徠翁美仲に与へられたる文を、美仲放蕩の時灊水預り放蕩やみて返したるに、其文巻物に出来たるを、村田治兵衛これを求め、鑑定を灊水に頼み書いてもらひ付置きしが、治兵衛も放蕩の節売て他人の手に渡りたる由なり。

一、徠翁聯に不朽者文、万古常有仲尼、不昧者心、千歳豈無楊雄（徠翁聯に不朽の者は文、万古常に仲尼有り、不昧の者は心、千歳豈に楊雄無し）。

一、絶句解大本并に古文矩は町医間瀬宗三書きたり。

一、東涯温厚の君子なりし故、講書は下手なり。豊宮崎の文庫にて書を講ぜし時は数百人の聴衆あり。東涯声ふるひて講ぜられしに、却て其謹慎なることを人称美しけるとなり。山田には東涯の門人多くありけると云ひ伝ふ。又た宅にて講書の時は至て小音なるゆへ聞とり難く、堀川の向にて桶屋のたがをかける物音にまぎれて別して聞へざりしとぞ。

一、書肆より貝原の点例を年玉として蘐園に持来ることあり。徠翁一寸見ながらすらく書こみ入れられたり。瀧水文卿も写し置かれたり。〔本田敝字文卿〕

一、春台の会に好き了簡を言出してもいやくと二度ほど云はるれば、能き見識も出さずしてやみぬるに、松崎君修は秘蔵の門人ゆへ会後に先ほど誰にかく云ひしは面白き由云ひければ、いつも春台さうかと合点いたされたり。人も兎角愛する所に昧まさるゝものなりと、子顕憤りて常に咄したり。

一、蘭亭は豪気の人にて、行儀甚だ正しく胡坐などせしことは曾てなき人なり。女房は十人ばかり持たりと、増田知陳の咄なり。

一、蘭亭の手跡を津田意参老所持なり。酔月の二字にて殊に見事なり。此酔月の字文卿持たるが、蘭亭門人の医何某とか云ふ人に所望されやりたりと、文卿自ら咄したる由。蘐園にも蘭亭の手跡にて有水と云ふ二字の額、常に徠翁祠堂の前に掛ありき。

一、唐詩典刑は唐後詩の凡例に書かれたり。唐後詩もとは唐詩典刑と云ひ、四家雋を漢後文と云ひたるを後に名を改められたりとぞ。

一、南郭が夏月の歌に「霄やみの梢涼しく端居して待出る間も夏の夜の月」

一、水戸黄門公の園を後楽園と云ふ。范文正公の語を以て付けられしなり。それを受けてにや、尾州の支封高須侯は共楽園と付けられたり。大学侯の園は南郭撰にて、占春園と付けられたり。

一、徠翁の書は、二辨論語徴学庸解等にて器量は見え過ぐる程なり。小技仮名もの等の板行を瀧水が世話するはあまり褒めぬことなりと、士寧云ひし由。

一、春台何やら封事を上られたることありて、穉明と君修と相封にして置きたりと云ふ。穉明に聞きたれば、焼捨になり今はあらざる由。（稲垣長章字穉明）

一、周易反正は穉明命を受けて出板せんとせしが、貞正也の説を用られたる故、貞と云ふは尾生が女と約して溺死したると云ふやうなる馬鹿りちぎなることにて、正也の説たしかならざるゆへ其説を書いて出さんとする内、穉明死したるゆへ今に出板なし。其説があると、恵明云ひき。

一、学庸解は初め高安彦太郎世話にて、野呂大蔵と云ふ伊勢の処士江戸に在りしに書かせたり。其板彦太郎蔵板なり。瀧水校合本出でゝ後、廃板させられたり。

一、室鳩巣は加賀侯に受廩して後白石を同藩に勧めけれども、白石望なき由にてゆかず。白石召出されたる後、此報に鳩巣を推挙し同召出されたり。白石従五位下筑後守に叙爵の時、文廟御前にて御太刀拝領五位の装束も下されたり。右御太刀拝領は万石以下には其例もなく、別格にて下されし由。

一、徂徠集に奥者帝之息壌也〔ひらけぬ土地、実は不毛のこと。〕と云ふことあり。息壌の字甘茂伝にあれども地名なり。佩文韻府などにも見えずと文卿云ひしが、恵明が詩に〔歳暮の吟の歌行なり。〕息壌の字あり。奥の産なれば意を知るべしと問ふに、前に付けし訓の如く答へたり。

一、読荀子、読韓非子、読呂氏などの書は宋学の猶ほ除かざる以前なれば、おかしな説まゝあり。印行するは宜しからざるを、何も角も信ずる餘り印行せしは過なりと、士寧は常に子迪のことを云はれたり。

一、徳廟、律のこと御すきにて、明律なども叔達に仰付けられ官刻あり。又た徂徠に律のこと御尋あるにより国字解も出来たり。叔達は外の事より律のことはよかりし。明律をきかするには約状と云ふものを取られたり。其約状此に記す。左の如し。

条　約

一律は人命の繫る所なり。君大夫問ふあらば、当に文を引いて以て対ふべし。慎んで意を以て増減し、その旨に阿り及びその強記を恃んで之を軽忽にする勿れ。

一律は異代異国の制なり。慎んで輒く之を当世に用ひ以て成憲を壊ることなかれ。

一律の書は文簡にして義深し。輒く解し難きの故を以て、古に法家ありて別に一家の学を為す。慎んで妄りに之を鹵莽の学者に伝ふる勿れ。害を貽すこと浅からず。

右訓誡を奉ぜざる者は白日の如きあり。

物　観

条約人名　服南郭　藤東野　平義質　劉世篤　岡正敏　増勝浄　葛西正対　丹玄　松貞吉　藤容　落敬　崎巌　橘遂質　室偉丈　江機　山広業　祝晴延　森公綏　田尚足　小田切尚綺　三谷逵

以上二十有一人

一、松平能登守殿は春台の門人にて、詩文など出来し人なり。

一、筑波は徂徠に謁見なし、徠翁歿後江戸に出でたり。

一、筑波はもと松平豊後守殿藩の人なり。五油赤坂に近きゆへ放蕩して亡命し、其後南郭に謁し游優館に会の時始て熊耳士寧などに近付きたり。春台は家を亡せし人なりとて寄せ付けざりしとなり。

一、高翼之は南郭高弟の門人なり。士寧出るまでは一人なりき。士寧出でゝ後、中悪しきゆへ会にも出でず、気篇やかましき人なりとて皆そしりたるに、南郭の云はれしは、まさかの時に己れが為めに身を捨つるものは翼之ひとりなりと、誉られたり。深切なる人の由。

一、京極公子は筑波の門人にて、夫より南郭士寧に属す。

一、仙田玄智と云ふ人本と京師の生れなるが、甚だ器量ある人物にて徠翁心易くいたされ、玄堂と号して集に文あり。町医より官医になり五百石を食めり。金華の師なり。金華まだ玄仲と云ひし頃、相門と将棊を指したりしを玄智見て大に叱り、家業あるもの箇様なる伎芸すべきことにあらずとて、盤を真木割にて打ち破りしとなり。さすがの金華も一生恐れしとなり。

一、南郭の三稿は熊元朗〔熊元白庵〕の世話なり。一日元朗宅に瀧水、熊耳、士寧、仲英など行き校合したり。其日は殊の外酒が長くして大杯を求むる故、螺杯の九合五勺入を維公宅より持ち来れり。大酔の上ゆへ誰も飲む者なかりしに、瀧水ばかり一杯飲みたり。後に熊耳は半分、士寧は七分目程のみ、皆酩酊して倒れたるを瀧水独り介抱し士寧を介抱しながら、尓後酒に於ては不佞に左祖せらるべしと云ひしに、士寧、「成る程服すべし、さりながら無念なることかな」と云ひし由。

一、才子の兎や角口利てやかましきを、野馬のやうに勝手次第に育ちたるゆへ教なければ上馬には成れぬと、鵜公云ひし由。此鵜公はもと長州の附庸吉川の藩人村尾権左衛門が子なり。兄弟三人ありて、鵜公の次は紀藩の奥にて涼月院と云ふ御年寄なり。真淵の門人にて古風家なり。弟は清水公の村尾権之助にて能書なり。何れも豪傑なり。村尾権左衛門は長州を何かのわけにて出で、軍学を以て松平和泉守殿より十五人扶持貰ひ居たり。権之丞其跡なり。

一、南留別志を林義卿が周南の為学初問とを取り合はせ校合して、蘐園談餘と題目して印行せし由なり。

一、筑波、本郷に住せしとき瀧水熊耳など訪れたるに今日は御目に懸る間敷とて断はりたり。両人不審に思はれしに四五ヶ月立ちて死したり。後よくく聞けば酒が呑まれぬとて断りたるとぞ。

一、円機活法は叱りながらつかふものなれば、調市と南郭付けられたる由。

一、春台の老子特解未定なりとて、稲穉明外に出さゞりしを、末期に子顕に譲りたる由。

一、詩書古伝は子顕〔大塩与右衛門〕君則など校合なり。韓詩外伝江戸板は君修の校合なり。

一、真淵士寧に初見せし時、自分の著述の書を譲るべきものなし、士寧ならば残らず譲るべしと云ひし由恵明云ひき。

一、井上嘉膳が会に瀧水、熊耳、文仲、孟玉などまいり、熊耳は先に辞し帰れり。此時如来取持に行き、殊の外瀧水、熊耳などを慇懃にあしらひ、熊耳の帰るとき嘉膳送らず。如来玄関に送り出で、坐に還りて瀧水に向ひ、酒いまだ不足なるべし、我に代りて勧められよと熊耳より託せられし由述べしが、瀧水それは足下の作りごとなるべし、熊耳の語意には非ず、もし熊耳ならばもはや子迪には酒をのませざれと云ふべし。足下の作りごと知れたりと云ひしを、文仲さすがは瀧水の挨拶なりと語りき。

一、如来は慶子の弟にて男振よき人なり。しかも殊の外世に阿る所ありておかしきことある人なり。自分にて冬至会の時、灣水、文仲なども行きしが、師弟上下を著けて威儀厳かに、庭には水など打ち、鳶の者皮羽織を著け鉄棒を引けり。人々不審しければ、今日の火の用心の為めに町人を頼みて斯くの如くなる由申す。又た其塾を見せんといふ。灣水など行て見られ、態と誉めて、扨々先生の盛なるには不佞等及び難し、箇様の事を見ては吾等は角がはえると戯れし由。総べて京都の諸生とりあつかひの如く、入塾の人には断を出させ、客にてもあれば給仕に使ひ、医者出家等には茶をはこばせ、外の会に行には先生の交を見るべしなど云うて、若党にして連るなど世智かしこき生得の人なりと、文仲の咄なり。されば尾藩にて五百石賜はり、布衣になり殊の外富家なる由。

一、千葉茂右衛門が会の時、如来京学せし自賛などしてよき淫薬の伝授を長崎にて受けたりと云ひたり。其時松窓〔関栄一郎〕不佞日本の世説を書んと思立たるに、足下をば徳行篇に入れんと思ひしが、今の一言にては惑溺に入れずばなるまいと云ひたる由。

一、太室〔渋井平左衛門〕は堀田侯の儒臣なり。七十ばかりの時、君修が云ふには、人は世間にて惜しむ内に死するがよし、先生も好時分なりと調戯したりとぞ。

一、君修父子蘭亭の門人なり。熊耳、蘭亭に往きて君修と初めて知る人になり、後に是れは私の親なりとて引合はされたり。熊耳、親が子を引合すべきに、子にて親を引合すはあちこちなり。君修は俊抜の人なりとて気に入らざりし由。

一、人見弥右衛門、経済録はすぐれて出来たるものなり。編題の立て方は何ぞ古人の目録によられつらんと云ひしを、灣水聞きて、それほどに目録をも立つるほどにてなければ、徠門の学者とは云はれぬと云はれき。

一、尾藩の中老津田応卿と云ふは唐画すぐれし人にて、南郭春台なども出会し、画を褒められたるを子迪の聞き居られたるにや、文卿にたのみ、人見弥右衛門を以て画を乞ひし由。

一、兼山は一旦灣水の養子になりしが、熊本侯へ代講に行きしとき、奥女中に女房約束せしことありて、細川侯よりも出入を止められしゆへ、灣水怒りて離縁せり。其後護園門下にては誰れもつきあはざりしに、南郭一人ふびんなりとて故の如くあしらひしが、人の肉を食したると咄せし人ありしより、これもよせられぬとなり。

一、京都の石川半兵衛と云ふ儒者、辨道解蔽と云ふ書を著はして辨道を排したるを、鳩谷持ち来り灣水に見せたれば、それに悉く非を打て標出せられしを見たりき。

一、日本へ漢士より通ぜし、古はもと呉の方より通じ始めしなり。呉はあやはなといふも、織姫の呉の方より来りしなり。既に太伯は天照太神しやと云説もあるより、于起は呉越とも云なれば、もろこしと云訓は諸越よりいふとみへたりと、稲垣長章物語なりと、恵明云き。

一、鳴島道筑はもと御同朋なり。後徠翁に入門してとりたてられ奥儒者となりたり。

一、文仲、詩の出来る毎に菅長卿〔五大夫のこと〕などゝ互に論じ争ひたるを、士寧聞て、

足下等は常に詩の工拙を論じて益を得ること多し。此方にはたとひよからぬ詩にても、夫を云て呉るゝものなしと云ひし時、文仲、近来の御作はのびぬやうなりと云ひたれば、士寧、さればそのことなり、若き時分は裸で堀池に飛び込む気なれば何もくもることなし。年過ぎては底が深いか石が有らうかと怪しむ心つよければ、飛込む気になり兼る処が乃ちのびぬ処なり。詩も同じことにて、容易に出来ぬ故、調ものび兼るなりと云ひし由、文仲の咄なり。

一、禅軾は蘭亭門人なり。四年ぶりにて君修に逢ひたる時近作ありやと問ふに、禅軾遅吟の人なれば五絶を一首見せたり。君修、一年に一句づゝ案じたるやと嘲りし由。

一、愿卿〔辰三郎〕は美童なり。烏石が龍陽君にて旅行或は青楼などへもつれ行たり。それを南郭は唯かはゆがるとのみ思はれたれども、もとは此訳にて、夫より養生も宜しからずとやぶりたると見へたりと、伯玄云き。

一、牛込伝久寺の天門上人、品彙の中の虚字ばかりを書ぬきて、唐詩虚字と云ふものを作りたり。春台なども称美し、南郭序をかきたり。夫れを関思恭持居て世話したるやうに云ひたるゆへ春台憤りしが、それ等の訳にて印行せぬと見へたり。後関其寧方より文卿かりて大村侯に見せたれば、其方世話せよと云はれたる由。

一、恵明が祖母とやらは春台の娣なり。其覚へ万人にすぐれたり。台翁と咄合の時、年号月日何時と互に昔物語せられし由恵明咄なり。

一、君修、士寧に逢度とて文仲に紹介を頼みける。文仲は殊の外士寧を信じたればことぐしく承合ひたるに、君修、士寧に何も用はなけれども、酒がつよきと聞きたるゆへ逢て見度しと云ひし由。

一、積翠園の徠翁の聯の石刻に、「手揮五弦、壁上名山欲響、目送孤雁、天外故人未還（手五弦を揮ひ、壁上の名山響けんと欲す。目孤雁を送り、天外の故人未だ還らず）」とあり。此聯赤羽にありたるを子宥十太をして双鈎にとらせしかば、南郭聞て贈るべしと云ひたるが、没後仲英の贈りし由、真蹟は雪斎が藩にありとなり。

一、聖堂類聚の目録子迪自筆の写

道中礼義物文極質経権徳仁孝友忠篤厚信恕恵周寛裕善良温実誠聖知聡明敏賢睿清廉耻公平節倹正直利貞恭敬遜譲不伐慎独勇剛強武毅果威命天帝鬼神祇

元亨利貞

聖堂類聚引書目

易　尚書　毛詩　春秋　左氏伝　公羊伝　穀梁伝　家語　孝経　論語　孟子　荀子　管子　晏子春秋

〔表紙うらに〕交学信政礼詩楽喪道利父母智勇改過富忠行志直政恭士民徳敬名義巧言事君婦人心愛名数明孝悌君子小人聖王先王仁朋友予一人師諫

右のとをり有之、丸を（ママ）付たるは出板これある分の印、此方にて付をく

一、徠翁二十五歳の時、南総にて手親ら写す所の唐詩訓解二冊、鼻紙の麁末なるに写す。評語皆徠翁なり。其序跋こゝに写す。

唐詩訓解一部二冊、徂来先生手自書者也。余嘗読訳筌題言曰、「在南総時、独蔵用大学諺解一本。」以為、窮僻之地、乏書如此乎。又以為、先生一時勧勉蒙生之言也。及閲此書、不覚敬起曰、「先生精力之所用、其卓越於千古、誠不誣矣。」夫唐宋以後、雕本肇起、市人日伝、万紙書目益夥、学者愈衰、何也。我東方、書籍之盛、今時為最。人好而且力、則無不獲、獲無不読。而我猶彼又何也。蓋先生所謂「在能思与不思」哉。又聞、先生少而居田間、山巌屋壁之蔵、適獲之牧豎之輩、乃手抄目讐、以当拱壁耳。中間還東都、毎獲一奇書、解衣縮食、以易之商賈。於是乎、二酉之蔵不啻也。最後検括諸故書、少壮之所抄録与蠹嚙鼠侵、悉併焚之。此書在焚之中、香谷上人在傍、請之。先生曰、「持去矣。此南総之旧物、後足見予之所以勤也。」上人伝之弟子梁公。余与梁公善、独使予閲之。素不得与先生同時而陪于下風也。而少壮真面目猶見之当年者、特梁公之賜也。此可以概先生南総時、又知東帰之奮。夫後之閲此書者、知先生之不我欺也。学之可以已哉。

（唐詩訓解一部二冊、徂来先生手より書く者なり。余嘗て訳筌を読みて題言に曰く、「南総に在る時、独り蔵して大学諺解一本を用いる。」以為らく、窮僻の地、此のごとく書くこと乏し乎。又た以為らく、先生一時の勧勉蒙生の言なり。此書を閲すに及び、不覚し敬起して曰く、「先生精力を用いる所、其の千古に卓越し、誠に誣はざる矣。」夫れ唐宋以後、雕本起こしはじめ、市人日に伝ひて、万紙、書目ますます夥し、学者愈衰えなり、何ぞや。我が東方、書籍の盛、今の時は最もと為す。人は好し且つ力あり、則ち獲らざること無し、獲りて読まざること無し。而して我なほ彼のごとし又た何や。蓋し先生所謂「思と不思に在り」哉。又た聞く、先生若しく田の間に居し、山巌屋壁の蔵、たまに牧豎の輩を獲る。乃ち手抄して目讐し、以て当に拱壁となるのみ。中間東都に還り、一奇書を獲るごとに、解衣縮食、之を以て商賈に易える。於是乎、二酉のただに蔵ならざるのみならずなり。最後諸故書を検括し、少壮の抄録する所に蠹嚙鼠侵を与えり、悉く併せて之を焚く。此の書焚の中に在りて、香谷上人傍に在りて、之を請ふ。先生曰、「持ち去る矣。此れ南総の旧物、後ち予之れ勤しくゆえんを見るに足るなり。」上人之れを弟子梁公に伝ふ。余は梁公と善し、独り予之を閲せしむ。もと先生と同時下風に陪せざるなり。而して少壮の真の面目なほ当年のごとし、特に梁公の賜なり。此れ先生南総の時を概すべし、又た東帰の奮を知る。夫れ後ち此書を閲するもの、先生我を欺かざることを知るなり。之れを学ぶは已むべし哉。）

明和丁亥秋九月　　野本定物撰

唐詩訓解序

此者攀龍石公二氏之所殫思也。評隲之詳最孜々、猶時代之辨矣。頃者手写正文一通、加之評語、稍附奇解。蓋意、初唐雅艶典麗、気象超邁。盛則高華明亮、格調深遠。中則瀟洒清

暢、興趣悠婉。晩則奇刻工緻、詞藻精切。故戯倣李西嵓錦琴之体、題其後曰、修竹茅斎過雨涼、垂帷棐几対秋光。芙蓉出水照初日、蘭菊着霜揺暁芳。隔澗清猿伴明月、映門紅葉帯斜陽。西風惆悵古人遠、一擲禿毫一断腸。

（此れは攀龍石公二氏の殫思の所なり。評隲の詳最も孜々として、猶ほ時代の辨矣。頃者一通の正文を手写して、評語を加え、やや奇解を附す。蓋し意、初唐雅艶典麗、気象超邁となり。盛則ち高華明亮、格調深遠となり。中則ち瀟洒清暢、興趣悠婉となり。晩則ち奇刻工緻、詞藻精切となり。故戯れに李西嵓錦琴の体に倣ひ、其の後に題して曰く、修竹茅斎　雨涼しを過し、垂帷棐几　秋の光りに対す。芙蓉出水して初日を照り、蘭菊霜を着りて暁の芳を揺る。澗を隔つる清猿　明月を伴ひ、映門の紅葉　斜陽を帯ぶ。西風惆悵して古人遠し、禿毫を一擲して　ただちに断腸す。）

元禄庚午孟秋之日　　荻徂徠書

唐詩訓解全部物茂卿手書。明和五年戊子、男道済閲。物子既称禄隠、其居尚近市喧也。遂移牛門、因値新正作此。藩中今日定何如、蓬髪急梳驚歳除。符換先生閉戸後、柏浮弟子問奇餘。唯歌白雪供高枕、寧惜青春照曳裾。自為王猷多種竹、牛門似是馬曹居。

（唐詩訓解全部物茂卿手書す。明和五年戊子、男道済閲す。物子既に禄隠と称して、其の居尚市喧に近くなり。遂に牛門に移して、因て新正に値して此れを作る。藩中　今日に定めていかんや、蓬髪を急に梳きて　驚歳を除く。先生戸を閉づ後　符を換へ、柏浮の弟子奇餘を問ふ。唯だ白雪を歌ひて　高枕を供へ、寧ろ青春を惜みて曳裾を照る。自ら王猷と為りて多く竹を種え、牛門馬曹の居に似る。）

物茂卿

右は加川子慶の所蔵なり。子慶云、大梁没後此奇物を換貨、余直一片を贈て取之と云。

一、蘐園門下人名

藤　忠統　〔姓藤原、字は大乾、猗蘭と号す。別に南山、西台、郁文の号あり。俗称は本多伊豫守。〕

丹治直道　〔琴鶴と号す。俗称黒田豊前守。〕

源　頼寛　〔姓は源、字は子猛、俗称松平大学頭。〕

越　正珪　〔姓は越智、字は君瑞、雲夢と号す。俗称曲瀬養安院、東都医官なり。〕

菅　正朝　〔後弘嗣と更む。姓菅原、字大佐、麟嶼と号す。俗称山田大佐、幼聡敏。年十三徳廟茂材を以て召見、特に禄二百石を賜ふ。二十四歳卒す。〕

嶋　鳳卿　〔姓は嶋島、字は帰徳、俗称道筑、東都の秘書監。〕

坂　安正　〔字は美仲、璜渓と号し、或は帆丘と号す。俗称は松倉安右衛門。〕

武　　敬　〔姓は源、字は文安、広陵と号す。俗称は武田長春院、東都の医官なり。〕

木　実聞　〔字は公達、蘭皐と号す。俗称木下右衛門、尾州公の大夫なり。〕

藤　煥図　〔字は東壁、東野と号す。俗称は安藤仁右衛門、年三十八没。〕

服　元喬　〔字は子遷、南郭と号す。俗称服部幸八、後ち小右衛門と更む。〕
太宰　純　〔字は徳夫、春台と号す。又た紫芝園とも号す。俗称太宰弥右衛門。〕
平　義質　〔字は子彬、竹渓と号す。俗称三浦平大夫。初め柳沢侯に仕へ後ち致仕して去り、吉田侯に仕へ亜大夫と為り以て徠翁に従遊す。故に自ら李に比し客任城孔巣父輩と徂来山に居り竹渓と号す。明律に精し。〕
県　孝孺　〔字は次公、周南と号す。俗称は山県少助、長州毛利侯の文学。〕
平　玄仲　〔字は子和、金華と号す。早く孤なり、冠するに及び族人謀りて医を東都に学ばしむ。数年其の志す所を非とし更に儒と為る。俗称は平野源右衛門。〕
石　之清　〔字は叔潭、大凡と号し又た黙斎と号す。俗称は石川重次郎。〕
根　遜志　〔字は伯修、武夷と号す。俗称は根本善右衛門。〕
岡　孝先　〔字は仲錫、嵊州と号す。俗称岡井郡大夫、巑岐侯の文学。〕
山　鼎　〔字は君彝、崑崙と号す。俗称は山井善六。〕
鷹　正長　〔字は子方、爽鳩と号す。俗称は鷹見三郎兵衛、田原侯の大夫。〕
佐久間義和　〔字は子巌、洞岩と号す。仙台侯の世臣、書を善くす。〕
吉　有隣　〔字は臣哉、孤山と号す。俗称吉田作兵衛、森川生実侯の大夫、御家様の書を善くす。徠翁俗書を要するごとに臣哉をして之を書かしむ。〕
藪　弘篤　〔字は震菴、字を以て行はる。俗称は藪久右衛門、熊本侯の世臣なり。〕
水足業元　〔屏山と号す。俗称平之進、後ち半助と改む、熊本侯の文学。〕
水足安方　〔字は斯立、博泉と号す。屏山の子なり、俗称は平之允。〕
源　儀治　〔字は京国、華岳と号す。俗称は九津見吉右衛門、参州の人、苅谷侯の世臣。〕
宇　鑒　〔字は士郎。〕
松崎堯臣　〔字は子允、亀山侯の世臣。〕
高野維馨　〔字は子式、蘭亭と号し、一に東里と号す。〕
西　子雄　〔字は仲英、姓は西村、南郭の義子なり。〕
秋　以正　〔字は子帥、淡園と号す。俗称は秋元喜内、岡崎侯の文学。〕
宇　恵　〔字は子迪、灊水と号す。俗称は宇佐美恵助、雲州侯の文学。〕
晁　文淵　〔字は涵徳、玄洲と号す。俗称は朝比奈甚右衛門、尾州公の世臣。〕
土　伯曄　〔藍州と号す。母命を以て徠翁に学ぶ、後故ありて医となり小倉侯に仕ふ。〕
田　良暢　〔字は子舒、蘭陵と号す。武州の人。〕
滕　元啓　〔字は維迪、南昌と号す。俗称は伊藤一臈。〕
釈　元皓　〔字は大潮、肥前松浦の人。〕
釈　道費　〔字は無隠、雑華室と号す。加賀の人。〕
釈　原資　〔字は万菴、芙蓉と号し、一に江陵と号す。東都高輪東禅寺に住す。〕
釈　了玄　〔字は円乗、天門と号す。〕

釈　大黙　〔名は慧寂、曇華と号す。〕
水　元朗　〔酒井侯の大夫、俗称は水野勘解由。〕
右四十有餘人記高弟大凡

一、徠翁が寄松祝の歌二首、「かぎりなきよはひとぞしる松枝の一葉くにこもる千年は」
「かぐろはぬ国はあらじないく千世もときはにしげる松の木陰に」
右一則拠幸田氏所蔵本追加之

一、徠翁が嘗て曰はれしに、公が木の下に居ましますれば、風あたりをはらうのなぞを曰へり。

蓑園雑話　終